ミツバチ科学 15(3)：137—140
Honeybee Science (1994)

グアテマラでの協力活動

大木　智之

1991年の12月から2年間，私は青年海外協力隊員として中米のグアテマラに派遣された．グアテマラは人口約900万人，面積が日本の約4分の1という小国で，コーヒー，バナナ，サトウキビを主要作物とする農業国である．私の住んでいたクブルコという村も，これといった特産物はなく，人々はマヤの生活そのままにトウモロコシとフリホーレス豆を作って暮らしていた．

任地には前任者として五十嵐哲也隊員（ミツバチ科学13巻4号参照）が活動しておられた．彼から最初，グアテマラではアフリカ蜂化ミツバチによって毎月2〜3人の死者が出ていると聞かされ，慄然としたのを覚えている．ともあれ，大学で研究目的でしか蜂を飼ったことのない私には，この五十嵐氏の存在は心強かった．彼のおかげで必要な養蜂器具はほとんどそろっていたし，なにより私が村にスムーズに受け入れられたのも，五十嵐氏が地元とのコミュニケーションを大事にしてこられたからだも思う．

さて私の派遣要請内容は「アフリカ蜂化ミツバチに対応した技術及び器具の研究と製作」であり，都市農村開発省という（日本の農協のような）機関が組織する婦人グループに，養蜂の指導をすることであった．以下，前任者より引き継いた業務内容のいくつかを簡単にふり返ってみる．

婦人グループへの巡回指導

クブルコ村ではもともと4つの婦人グループが，それぞれ40群の蜂で養蜂を始めたらしい．しかし1985年のアフリカ蜂化ミツバチの侵入によって養蜂は衰退し，私の着任時には2か所の蜂場で4〜5群の蜂を細々と飼っているにすぎなかった．婦人たちも副業としての養蜂にはあまり期待していないらしく，メンバーも当初の半分以下に減っていた．私ははじめ，現地職員の蜂場巡回に毎週ついて回っていたのだが，この集会がどうもつまらない．職員が何やら時間つぶしとも思える道徳的な講話をし，そのあとおざなり程度に蜂観察をするのであるが，この蜂観察も，できればやりたくない（できれば刺されたくない）といったもので，蜂が暴れ出すと蓋を開けっぱなしにして逃げてしまい，今日は蜂が荒くてダメだ，と帰ってしまうのであった．養蜂指導とはいっても，蜂の扱いはすべて職員の男性が行い，婦人たちは回りで煙をかけるだけ．これではいつまでたっても婦人たちが技術をおぼえるはずがなかった．もっとも婦人たちも煙かけの方がイザという時安全だし，何より服装がスカートにサンダルばきなので（伝統的なモラルもあってオーバーオール

図1　中米地域，矢印がグアテマラ

図2　ハチミツを使ったお菓子作り

は着たがらない）自然，蜂の扱いは男まかせになってしまうのである．私は毎週，巡回に行くたびに婦人たちが気の毒になった．かれらは特に何のメリットもないのにはるばる30分もかけて山道を歩いてくるのである．何かもっとこの集会を魅力あるものにできないかと思い，私はハチミツのお菓子づくり（図1）を行ったり（男は絶対に料理をしないところなので気味悪がられた），日本の友人から期限切れで捨てられている野菜の種を送ってもらい家庭菜園を作ったり（図2），自然科学関係の映画を見せたり，養蜂家向けの新聞をつくったりした．

ところで私はアフリカ蜂化ミツバチに対して「殺されるかも知れない」という極端な先入観を持っていたのだが，はたしてそれは難しい蜂であった．マニュアル通りに天候を観て，充分くん煙をしてから蓋を開けるのだがい何が気に入らないのやら猛然と襲いかかってくるのである．気がつくと白いオーバーオールに50〜60匹もの蜂がダーツの矢の様に刺さっており翅一を震わせ「ニジーッ」という不気味な合奏をしている．そしてこのうちの何匹かの針が，服をつきぬけて皮膚に刺さり（暑いので下はTシャツのみ），体をひくとまた服が突っ張ったところで針が刺さるといった具合に，体に毒が回り，焦りで発汗する．そのうえ数匹の蜂が服のすきまから入りこんで面布の中をバチバチ大暴れして，のどや目の上を刺してくる．こうなると本人の意志とは無関係に膝がガタガタと震え出すのである．作業をあきらめて，蜂を全身にまといながら退散すると今度は草かげで休んでいたブタやニワトリ，イヌなどが大騒ぎを始めて逃げまわる．すると少し離れた人家で舌打ちの音が聞こえたと思うや子供が泣き始め，ドタバタした大騒ぎが近所中に広まってしまうのである．このとき，いかにも平然としていなければならないのが「指導者」のつらいところであった．当初は刺されるとよく発熱して寝込んだ．半年もたつとアレルギー反応は無くなり，パニックにもならなくなったが，やはり今でもアフリカ蜂化ミツバチは恐い．

アフリカ蜂化ミツバチに対応した器具の普及

具体的にはオーバーオールや大型くん煙器のことなのだが，クブルコのような小さな村で，しかも貧しい農家の主婦が副業でやるというのだから高価なものが買えるはずがない．また前述した様にオーバーオールは着たがらなかった．とにかくなるべくお金をかけないでやることをモットーに，粉ミルクの缶とタイヤのチューブなどを利用して，リサイクルくん煙器を作ったりした．また納屋で壊れて眠っている古いくん煙器なども修理して回り，大変喜ばれた．

規格の合った巣箱と巣枠の普及

グマラマラの養蜂家のほとんどは，蓋と胴と床がバラバラの，すきまだらけの田舎巣箱を使

図3　家庭菜園で

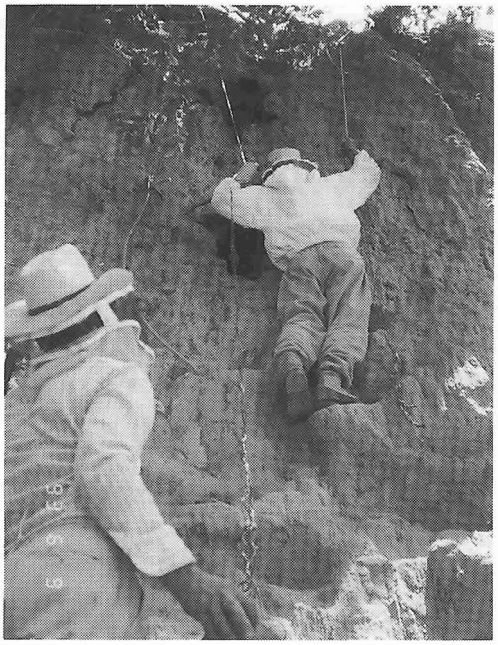

図4　崖の穴の中から野生群を採集する

っていた．もともと副業の定置養蜂なら箱もこれで充分なのだが，移動や巣枠の規格のこととなると，やはり日本式巣箱の方が便利である．前任者もとくにこの巣箱の作製と普及には力をいれていたので私も作ってみたのだが，専用の工具が必要であったり，1mmの狂いも許されないのでひどく経費がかかり，完成品は田舎巣箱の4倍以上の値段になってしまった．首都でならまだしも貧しい田舎の村ではこうした高価な巣箱は求める人もなく，工具の問題から大工の養成もできなかった．もっとも移動式巣箱は蜂どろぼうの格好の獲物なので，盗難があたりまえのこの国では，ぼろぼろの田舎巣箱の方がかえって便利かとも思えるのであった．

分蜂群の収容と移動

赴任して半年も経ったころ，クブルコ村からバスで3時間程行った村のさらにその奥の村で養蜂指導の要請があった．このサンガブリエルという村にはバスが通っておらず，慢性的な水不足で土地は赤焼けしており，市場がないので食べ物も満足に手に入らず，おまけにスペイン語が通じないという大変なところであった．この村でも，開発省は婦人グループを組織して養蜂を行っており，私の赴任時には5群程の巣箱が置いてあった．

さて，このグループにフロレンシアというおばあさんがいた．彼女は私のバイクの音が聞こえると，とことこやってきて蜂場管理を手伝ってくれるのである．グループの最長老ということもあって気を効かせてくれているのであるが，オーバーオールを絶対に着ないのでよく刺される．先日も，分蜂群がどうだこうだと話してくれるのだがマヤ話なのでよく解からない．どうも私がいないときに分蜂群を発見し，一人で（!）捕まえに行き，刺されて失敗した，という様なことを言っているのである．彼女は私の力不足で蜂場の蜂を一群にまで減らしてしまったときにも，ちゃんと来てくれて煙を噴きかけてくれた．私はとにかく群を元に戻し，婦人たちにもう一度やる気を出してもらおうと，お金を払って分蜂群情報を仕入れ，分蜂群を捕まえてはこの村に持ってきた（図4，5）（日本式巣箱はこのときここも役立った）．一年間で20群程捕まえたのだが，気に入らないとすぐ逃げていってしまう．それでも任期終了までには元の群数まで戻すことができ，グループもなんとか維持してこれた．

私の最後の巡回の日，フロレンシアおばあさんは来なかった．代わりに娘さんが来ていて，「母は今日来ると，きっと泣いてしまうので来ない．朝から教会に行ってしまった．あなたにありがとう，気をつけて帰ってくれと言ってい

図5　木の枝にとまった分蜂群をとらえる

た.」というようなことを，たどたどしいスペイン語で伝えてくれた．今でもあの村では，養蜂を続けてくれているだろうか．電車の中でおばあさんを見かけるとつい思い出してしまう．

蜜源植物の増殖研究

トウモロコシの収獲が終わったあと，畑にはフロールアマリーヨ（「黄色い花」の意）といわれるキク科の植物が一勢に咲く．これはこの時期に咲く黄色い花の総称で，一様に良質な蜜を出す，すばらしい雑草蜜源であった．11～2月の花期を過ぎると，今度はマードレカカオ（*Gliricida sepium*: カカオに日陰を作るために植えられる木）や，スキナイ（*Vernoria leiocarpa*）が咲き出す．また，コーヒーやミカンも大事な蜜源であり（コーヒーの蜜は金色をしていてなかなか美味であった），トウモロコシは主に花粉源として役立っていた．私も雨期が近づいたころ，空地を見つけてはレンゲ，クローバー，ヒマワリなどの種を播いて回った．レンゲ，クローバーは平均気温の関係で開花しなかったが，ヒマワリは良く成長して巨大なその花が村人たちの興味を引いた（流蜜量は未確認）．また，村の育苗場からコーヒーやミカンの苗を一本50円くらいで買ってきては婦人グループの一人一人に配布した．クブルコ村では無計画な森林伐採が続いており，自然保護の面からも植林は注目され，続けられている．

女王蜂の人工養成と蜂群の増殖

着任して一年後の流蜜期に，始めてイタリア蜂女王を王籠導入した．3頭を貯蜜豊富な単箱群に導入したのだが，成功したのは一群のみ．他は女王を追い出して働蜂産卵を始めてしまい，もう一群は女王を連れてか，捨ててか，そのまま逃亡してしまった．問題は受け入れ群の質（分蜂収容群なので老蜂だった?）や，女王蜂の産卵能力にあったのかもしれない．いずれにしてもわずか5～6箱で細々と経営している農家には一群の失敗も許されないので勧められなかった．しかし誘導に成功した群に関しては本当におとなしく，婦人たちが安心しているのを見ると，イタリア蜂導入は今後の最も重要な課題だと思うのであった．

以上，私の活動をかいつまんでみたが，技術不足，勉強不足から指導どころか迷惑をかけてしまったことも多々あった．それでも目をつむって，あたたかく受け入れてくれたグアテマラの人々，特に開発省の職員，婦人グループのおばさんたちには本当に感謝している．また任期中色々とご指導頂いた吉田忠晴教授，JOCV事務所及びグアテマラ隊員の方々に心より御礼申し上げ，報告を終わりたいと思う．

（〒238　横須賀市三春町4-38
元青年海外協力隊員）

Ohki, Tomoyuki. Beekeeping in Guatemala. A volunteer's activity. *Honeybee Science* (1994) 15 (3) : 137-140. 4-38, Miharu-cho, Yokosuka, Kanagawa, 238 Japan.

This report introduces the activity of a member of Japan Overseas Cooperation Volunteers, who was working in Guatemala for 2 years to cooperate a program of beekeeping development mainly for Mayan women. The program was to take measures against Africanized honeybees by improving appropriate equipments and technology.